

(別紙様式3)

令和7年度あいちラーニング推進事業研究報告書【重点校】

学校番号 52
学校名 愛知県立一宮高等学校
校長氏名 松原 正明

研究責任者職・氏名	教頭・大森 祥子	
研究テーマ	ICTを活用した主体的・対話的で深い学びを推進する授業づくり	
本年度の研究目標	(1)各教科の特性を生かした主体的・対話的で深い学びを推進する授業を、ICTを効果的に活用することで充実させる。 (2)(1)の前提となる教員のICT活用能力の向上を促す。 (3)レジリエンス(折れない心)をもち、課題の解決に向けて、粘り強く努力できる心身ともに逞しい人を育てるため、生徒の主体性、共同性、論理的思考力、科学的探究力、コミュニケーション力を一層育成する各教科の取組について検討する。	
研究の実施内容		
実施月日	内 容	備 考 (対象生徒等)
令和7年		
5月1日	第1回あいちラーニング推進委員会	該当教員
5月1日	Copilot研修①	全教員
5月21日	授業研修週間	全教員
~6月6日		
5月22日	Copilot研修②	全教員
6月26日	Copilot研修③	全教員
7月28日	第1回あいちラーニング推進事業連絡協議会	教頭・教務主任
9月25日	第2回あいちラーニング推進委員会	該当教員
10月下旬	授業感想アンケート	全生徒
~11月下旬		
10月30日	第3回あいちラーニング推進委員会	該当教員
11月7日	主幹校による公開授業及び研究協議への参加	教頭・教務主任
11月14日	公開授業及び研究協議	全教員
令和8年		
1月7日	Copilot研修④	全教員
1月22日	第4回あいちラーニング推進委員会	該当教員
3月13日	報告書のとりまとめ、ホームページへの掲載、主幹校への報告	教頭・教務主任
3月下旬	第2回あいちラーニング推進事業連絡協議会	教頭・教務主任

研究成果の評価及び普及・還元に関する実績

1 研究の取組

「ICTを活用した主体的・対話的で深い学びを推進する授業づくり」のために、以下の取組を行った。

(1) あいちラーニング推進委員会及び各教科会

あいちラーニング推進委員会を計4回（うち1回は紙面のみ）開催した。昨年度に引き続き、研究の進め方を中心に検討し、研究テーマ・研究目標を策定した。その上で、各教科会において、研究テーマを実現できる適切な場面・内容・指導方法を検討するとともに、公開授業担当者を決定し、11月14日への公開授業及び研究協議会に向けた準備を進めた。

公開授業後は、授業担当者及び教科主任を中心とした各教科会で、今年度の研究の成果と課題のまとめを作成した。以下は各教科による報告である。

日時	11月14日	教科【科目】 学年	国語【SSH国語α】 1年	指導者	増田 葵
方法	ロイロノートのテスト作成機能を用いて、筆者の考えに対する理解を深める。				
<p>ロイロノートのテスト作成機能を用いて、筆者が批判するリバタリアンの思想を具体的な台詞にし、筆者の考えに基づく反論を考えさせる記述問題を生徒自身に作らせた。その際、自分が作った問題の解説も書かせ、生徒同士で問題を解き合い、お互いの解説を評価させることで、主体的・対話的で深い学びへと繋げることができた。また、リバタリアンの思想を身近な事例で考えさせることで、生徒は主体的に「自由」や「権利」など、抽象的な概念について主体的に深く考えることができた。そして、生徒同士で作成した問題を解き合う中で、具体的な事例に基づいて筆者の主張を粘り強く理解しようとする生徒の姿も見られた。ロイロノートで作成した問題は、簡単に共有することができるため、筆者の主張を具体事例で考える機会をより多く設けられただけでなく、生徒同士でお互いの問題を解き、その解説を検討し合うことで対話的に筆者の主張に対する理解を深めることができた。</p>					
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>Q1 高所得者ほど多く税金がとられ、低所得者を含め国民全体に税金が使われるのはおかしいので、累進課税を廃止すべきだ。</p> <p>筆者の考えでは、競争の勝者であってもその取り分の一部を競争の敗者に分け与える義務があり、その理由として、世の中には私有化に馴染まない共通の資源があることであるとしている。もし全員が同じだけ税金がとられると、低所得者に負担が行き渡らなくなってほとんど人がいなくなり、最終的には共同体が立ち行かなくなってしまう。</p> <p>税金は社会的共通資本に使われ、それはすべての人に与えられるべきものである。もし累進課税を廃止すると、税金を確保できなくなり社会的共通資本の維持が困難になる。そうなると共同体が立ち行かなくなってしまうため、累進課税は廃止すべきでない。</p> <p>高所得者層からの安定した税収は医療や年金など社会を支える重要な財源となり、共同体全体の存続や向上に繋がるので廃止すべきではない。</p> <p>解説</p> <p>筆者の考えでは、税金は社会的共通資本として賢く分配されるべきであり、累進課税がなくとも、教育や社会インフラが提供されることで低所得者が暮らし、共同体の存続が立ち行かなくなるため、累進課税は廃止すべきでない。</p> </div>					

日時	11月14日	教科【科目】学年	地歴【歴史総合】1年	指導者	山田 仁美
方法	ロイロノートを用いた資料の提示と意見の共有				
<p>1 概要とねらい</p> <p>本実践は、第一次世界大戦後の国際秩序の変化や大衆社会の形成を扱う単元の一環として実施した。「衣服・ファッション」を題材とし、ロイロノートを活用することで、生徒が資料を主体的に読み取り、対話を通して思考を深め、歴史的事象を現代的課題と結び付けて考察する学習を目指した。また、対話的な活動を通して多様な視点に触れながら思考を深め、歴史的事象を現代社会と関連付けて考察する力の育成を図った。</p> <p>2 ICT活用を中心とした実践の工夫</p> <p>衣服・ファッションに関する図版資料をロイロノートの「資料箱」で提示し、生徒一人一人が端末上で拡大・比較しながら資料を確認できるようにした。個人での思考、班内での共有、再整理という学習過程を通して、対話的で深い学びを促した。また、共有ノートを活用し、現代的課題を全体で共有することで、多角的な考察へとつなげた。</p> <p>3 成果と課題</p> <p>資料読解が個々のペースや興味の方向性に依拠して行えることもあり、生徒は資料を主体的に読み取り、積極的に学習に取り組む姿が見られた。また、考えを可視化した上で対話を行うことで、意見の違いや共通点に気づき、思考を深めることができた。一方で、タブレット端末やロイロノートの扱いに不慣れな生徒にとっては、操作そのものが負担となり、思考の妨げになる様子もみられた。普段の授業のなかでなるべく活用をすすめていきたい。</p>					

日時	11月14日	教科【科目】学年	数学【数学B】2年	指導者	中村 友哉
方法	Powerpointを用いた要点の整理とロイロノートを用いた解答の共有と添削				
<p>Powerpointを用いて、階差数列および数列の和と一般項の求め方を整理した。アニメーション機能を活用することで、一般項の求め方を視覚的に示し、概念形成につなげることができた。一方で、スライドが流れていってしまい、全体の流れが分かりづらくなってしまったという課題があった。メリット、デメリットを理解したうえで、板書とスライドを使い分けていく必要があると感じた。ロイロノートを用いた解答の共有と添削では、代表生徒の解答をタブレット画面上で共有し、添削しながら解説を行った。代表生徒と自分の解答を比較しながら解説を聞くことで、間違いやすいポイントや解答の記述の仕方を整理することができた。また、板書するときと比べ、時間短縮につながり、より多くの問題に取り組む時間を確保することができた。</p>					
					
				写真【Powerpointで階差数列を説明する場面】	

日時	通年	教科【科目】学年	理科【生物基礎】1年	指導者	小椋 弘貴
方法	海外の科学関係動画を用いた授業実線				
<p>生物基礎の腎臓の授業の導入として、全文英語で放送されている海外の授業用動画を流し、この時点での本時の授業内容を一度確認した。次に、重要語句を予想するなどグループで話し合う時間をつくり、議論をさせた。その後プリントを用いて講義を行い、最後にもう一度動画を流すことで理解をさらに深めさせる方法を取った。</p> <p>英語による動画を一度視聴させた後のグループの話し合いの時点で、授業予定の重要な部分がある程度拾い出せている生徒も数人おり、その後の講義で腎臓の具体的な働きなど語句の理解を深めさせることができたように思う。2回目の動画視聴では、手持ちの図表と照らし合わせるなど、積極的な活動が見られた。</p> <p>多くの動画を用いての授業は理解しやすく効果的であるが、今回あえてすぐ理解しにくい、考えさせる動画を用いたことで、思考力を高めることも心がけて実践した。じっくり考えさせる授業を今後も検討したい。</p>					
					
					写真【授業の様子】

日時	11月14日	教科【科目】学年	保健体育【保健】2年	指導者	杉浦 崇仁
方法	ロイロノートの共有ノートを用いた授業実践				
<p>ロイロノートの共有ノートを用いて、ブレインストーミングを行った。環境汚染問題の対策について意見を出し合い、具体的な解決策まで考えるという授業展開だった。</p> <p>良かった点としては、ロイロノートの中にある既存のシンキングツールを用いることで、分析の時間への移行はスムーズに行うことができた。また、必要に応じて調べながらブレインストーミングをすることができるため、多くの意見を出すことができたと考えている。</p> <p>悪かった点としては、課題設定が少し曖昧だったため、内容の濃い解決策を考えることができたグループが少なかったことである。</p> <p>今回の授業実践を通して、ロイロノートなどのICTを活用したグループワークは非常に有効であると考えている。しかし、指示が曖昧になってしまったり、使い方が適切でなかったりするとICTを使うメリットがなくなってしまう。今回の授業実践に限らず、今後も積極的にICTを活用し、有効なICTの活用方法を模索していきたい。</p>					
					

日時	11月14日	教科【科目】学年	外国語（英語） 【論理・表現I】1年	指導者	山崎 久史
方法	生成AIを用いた英作文添削によって主体的学びを促す授業実践				
<p>1 目標：英作文添削における生成AIの活用法を学び、自己添削に活用できるようにする。</p> <p>2 展開：あらかじめ自力で書いた「最近困ったこと・困っていること」についての英作文を4人のグループで共有し、その後各自で生成AI（Copilot）を用いて添削する。添削後の文章を再度共有し、変更箇所を確認する。さらに、各自が添削の中で用いた生成AIに対するプロンプトを紹介し合い、今後も有用なもの、および避けた方が良いものを話し合う。</p> <p>3 結果：良いプロンプトとしては、「文法的に正しくして、修正理由も教えて」や、「変更箇所を解説して」のように、あくまで自らの作文力を伸ばそうとするものが見受けられた。また、「英検2級レベルで…」のように語彙・文法レベルを上手に制約するものも見られた。悪いプロンプトについては、「ネイティブらしく」のように抽象的な希望だけを指示すると、生徒の能力を逸脱してしまったり、表現がむしろ不自然になってしまったりしたようだ。</p> <p>4 反省・課題：プロンプトについては、語彙・文法・語法レベルにとどまらず、文章全体の構成に関するものの活用の可能性が感じられた。生成AI自体が日々進化しているので、活用する側も継続的な利用により、有用なプロンプトをアップデートする必要がある。</p>					

日時	11月14日	教科【科目】学年	家庭【SSH家庭】1年	指導者	館 千晴
方法	ロイロノートを使った授業展開				
<p>生徒の食生活への興味関心が高まるよう、ロイロノートを活用した授業展開を試みた。ロイロノートを使い黒板のスクリーン上や生徒用タブレット、スマートフォンの画面を通して授業の内容を視覚的にも理解しやすくした。最初に「テストカード」を活用し、自身の食生活を振り返らせるアンケートを行い、グラフにまとめた結果をクラス全体で共有しながら話し合い、食生活についてより深く考えるきっかけとした。また途中にクイズ形式の質問をいくつか取り入れ、授業への集中力が継続するようにした。</p> <p>ロイロノートを使用することで、アンケートやクイズの結果もすぐにクラス全体で共有でき、写真などで視覚的にもイメージしやすくなるのは、理解を深めることに役立った。</p> <p>今後は、質問に対して「提出箱」も利用し、他の生徒の意見を参考にさせたり、「シンキングツール」なども利用し、主体的・対話的な学びを深めていきたい。</p>					
<p>写真1【テストカード】</p>  <p>The image shows a digital interface for a 'Test Card' activity. It contains a list of six multiple-choice questions (Q1-Q6) related to eating habits. Below the questions is a bar chart titled 'Q3 自分自身の食生活について、もっと考えるための理由！' (Reasons for wanting to think more about your own eating habits!). The bar chart shows the number of students who selected each option for Q3. The options and their counts are: '食生活が健康に良いから' (14), '食生活が楽しくなるから' (23), '食生活が豊かになるから' (21), '食生活が便利になるから' (9), '食生活が安全になるから' (7), and '食生活が環境に優しいから' (28).</p>					

日時	11月14日	教科【科目】学年	情報【情報Ⅰ】2年	指導者	鈴木 淳子
方法	生成AIを活用した情報デザインの考察				
<p>生成AIを思考のアドバイザーとして活用しながら、情報デザインに関する考察活動を行った。雑誌などの具体例を題材とし、生成AIとの対話を通して「誰に」「何を」「どのように伝えたいのか」という観点で考えを深めさせることで、生徒は自分の考察を言語化し、整理しながら学習を進めることができた。生成AIによる一問一答形式の質問により、一貫性を持って、段階的に思考を深めることが可能となった。</p> <p>公開授業を行った「情報デザインと表現の工夫」の単元では、提示された雑誌ページについて、まずターゲット層やペルソナを想定し、その上で文字・配色・レイアウト・写真や図といったデザイン要素がどのような効果をもたらしているかを考察させた。生徒は生成AIに自分の考えを問い返されながら整理し、表現の意図とデザインの間関係を具体的に捉えることができた。この活動を通し、情報デザインが目的に応じて選択・構成されるものであることを理解し、伝え方を意識した表現への意欲を高めることができた。</p>					
					
				写真【生成AIと対話する生徒の様子】	

(2) 授業感想アンケート

授業感想アンケート（10月下旬～11月下旬に実施）での、あいちラーニング推進事業に関連のある質問への回答の状況は次の通りである。各教科の一部の授業でのアンケート結果であることに留意する必要があるが、教科によってICTの活用状況や、主体的参加できる展開かどうかには、生徒の感想にも違いがあることが明らかである。授業改善に活用できるよう、各教科にデータを提供するとともに、職員会議でも共有した。

※関連のある質問：質問11 この授業はICTを効果的に活用している。

質問5 この授業は主体的に参加できる展開になっている。

	質問11 この授業はICTを効果的に活用している。					質問5 この授業は主体的に参加できる展開になっている。				
	大いにそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	計	大いにそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	計
国語	32.5%	38.1%	18.6%	10.8%	100.0%	49.2%	42.9%	6.5%	1.4%	100.0%
地公	64.1%	28.5%	5.9%	1.5%	100.0%	48.2%	44.4%	6.4%	0.9%	100.0%
数学	14.3%	20.3%	31.0%	34.4%	100.0%	46.1%	46.0%	7.3%	0.7%	100.0%
理科	25.1%	29.0%	20.2%	25.7%	100.0%	29.3%	43.6%	23.0%	4.1%	100.0%
保体	50.0%	32.0%	12.3%	5.7%	100.0%	83.6%	14.8%	1.6%	0.0%	100.0%
英語	55.5%	36.8%	6.8%	0.9%	100.0%	45.2%	45.6%	8.4%	0.8%	100.0%
家庭	48.1%	39.7%	7.7%	4.4%	100.0%	44.8%	46.1%	8.4%	0.7%	100.0%
情報	94.2%	5.8%	0.0%	0.0%	100.0%	54.8%	33.7%	9.6%	1.9%	100.0%
計	38.5%	30.2%	16.3%	15.0%	100.0%	43.9%	43.7%	10.7%	1.6%	100.0%

授業感想アンケートは、全教員が実施することとしているが、全体の実施率が約7割であった。昨年度の6割弱よりは向上したが、授業改善のための有意義な機会としてより多く適切に実施されるよう、職員会議等での啓発を行う必要がある。

(3) ICT活用推進のための校内研修

ICT活用推進のため、情報化推進者が企画して、職員会議時に短時間での校内研修を計4回実施した。本校では全教員が使用できる有料版の Copilot について、活用方法の提案や活用事例の紹介など、短時間ながら、実践的で充実した研修となった。

2 今年度のまとめ

以上のように、あいちラーニング推進委員会を中心に、各教科会や情報化推進者の協力を得ながら、「ICTを活用した主体的・対話的で深い学びを推進する授業づくり」の実現に向けて、各種の取組を進めてきた。

本校では、ICTを活用することで生徒の主体的・対話的で深い学びが実現している授業が、どの教科でも見られる。これは、各教員の研究と修養の賜物であると同時に、教員同士が学習指導について普段から議論を重ねて資質向上に努めてきた本校の文化によるところが大きい。ICTの活用については、もとより教科・科目の特性との親和性に大きな差がある。加えて、新たな機器やアプリケーションが次々に登場することから、それに対応するだけでもかなりの時間と労力が必要となる。このため、教員間・教科間で取組状況に差が生じており、それは授業感想アンケートの結果からも明らかである。また、公開授業での取組が散発的なものに留まっている教科もある。あいちラーニング推進事業は今年度で終了するが、今後については、重点校としての2年間での意欲的・先進的な取組やその成果と課題のさらなる共有を進めることで、教育環境の変化にうまく適応しつつ、より適切な学習指導が実現できるよう、授業改善に努めたい。

※ 本研究報告書は、令和8年3月13日までに当該地区の主管校に提出する。

※ 名古屋地区においては、旭丘高校、千種高校、城北つばさ高校は瑞陵高校へ、明和高校、中川青和高校は名古屋西高校へ提出する。